

在が語られていないのは、残念であり、また、『扶桑略記』に引かれたものの位置付けは、私の結論とは異なっているものの、早い時期に、見直す必要性のあるという指摘に解釈されるのであるが、どういふわけか、この指摘は、その後無視された感がある。

井上光貞氏の文献解題は、大江匡房の『本朝神仙伝』の「役優婆塞」の部分の記述について、それが『三宝絵』の所伝と共通する点のあることを指摘された点は、重要なところであるが、『本朝神仙伝』の「役優婆塞」そのものが、都良香の『吉野山記』に依拠して記されていることに關しては、部分的とされており、この点は、本文に記したとおりであるので、納得できない。

『本朝神仙伝』に関する研究成果の一端については、拙稿「都良香の散文作品をめぐる研究の現状とその問題点の整理―『富士山記』を中心として―」（立正大学文学部論叢）第一〇二号（一九九五年九月）掲載）注一（二〇ページ）において示した。また、役行者に關しても、その注三（二二―二六ページ）において、簡単な研究史を整理してあるので、併せて参照いただきたい。

森末義彰・市古貞次・堤清二編『補訂版国書総目録』第一卷（『岩波書店』一九六三年十一月初版。一九八九年九月補訂版第一刷）五二九ページの「役君御伝鈔録並梵僧之事」という項目には、「一冊、角―扶桑略記古本、類―伝記、写―無窮・神習」とあり、こちらは、『扶桑略記』文武天皇五年（大宝元年）五月条に引用されている「役公伝」を抜粋したものに、書名「役君御伝鈔録並梵僧之事」を付したものであり、目録の記載どおりで、問題はない。

(3) 堀越光信「扶桑略記」皇円撰述説に関する疑問（『国書逸文研究』第一四号（一九八四年十二月）掲載）、同「扶桑略記」撰者考（『皇学館論叢』第一七卷第六号（一九八四年十二月）掲載）などが、大江匡房撰を想定しているのに対し、田中徳定「扶桑略記」撰者の性格について―引用仏教書の側面から―（『駒沢国文』第二九号（一九九二年二月）掲載）は、これを否定し、比叡山の天台密教修学者が中心的存在として大きく関与していたことなどを指摘されているが、『扶桑略記』撰者については、いまだ定説をみるには至っていないのが、現状である。

(4) 単行の『富士山記』という書物の写本に關しては、既に、高田信敬「竹取物語断簡新出二葉―（付）延べ書き『富士山記』―」（『国文学研究資料館紀要』第一〇号（一九八四年三月）掲載）注2において、『国書総目録』には一本も記載されていないが、写本の存在を指摘された山岸徳平「富士山記」解題（『群書解題』第二卷・文筆部〈群書類従完成会、一九六一年十一月初版。一

九八一年十一月三版使用）五三ページ）の記述を尊重されているが、単行の『富士山記』という写本は、管見には触れず、わずかに、室町時代初期の書写にかかる大東急記念文庫所蔵十卷本「伊呂波字類抄」第八「安」の「浅間大神」の箇所に、都良香の『富士山記』の一部分が、出典が明記されることなく引用されている例が古い。後世の書物、度会延経の『神名帳考証』卷四・駿河国富士郡浅間神社の項に、「都良香富士山記云、山名富士取郡名也。山有神名浅間大神」と記されているが、これらも、『本朝文粹』卷第十二・記（小島憲之校注日本古典文学大系69「懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹」〔岩波書店、一九九六年六月〕所収）に収められている「富士山記」を用いたものでないとは言えない。

『本朝文粹』に収録される以前における各作品の状況に關しても、調べを進めているが、いまだ、その全容を明確にするには至っていない。こうした点に關しては、「神仏習合思想史上の大江匡房」（和漢比較文学会編和漢比較文学叢書第十四卷「説話文学と漢文学」〔汲古書院、一九九四年二月〕所収）などを発表されている吉原浩人氏の研究を参照する必要がある。併せて、拙稿「都良香の散文作品をめぐる研究の現状とその問題点の整理―『富士山記』を中心として―」（前掲）を参照いただきたい。

(5) 牧野和夫氏より早く、『本朝神仙伝』の撰者に關する研究を発表された平林盛得氏は、『本朝神仙伝』大江匡房撰説について―菅原信海氏「フィロソフィア」第四十八号御所論批判（『国語と国文学』第四三卷第一二二号（一九六六年十二月）掲載。のち同著「聖と説話の史的的研究」〔吉川弘文館、一九八一年七月〕所収）において、菅原信海「本朝神仙伝についての一・二の疑問」（『フィロソフィア』第四八号（一九六四年十二月）掲載。のち、『本朝神仙伝』撰述に關する疑問」を改題の上、同著「日本思想と神仏習合」〔春秋社、一九九六年一月〕所収）が、大江匡房撰述に対する疑問を投げかけられた点に關して、反論を展開されている。平林盛得氏はこれの中で、大江匡房が、「都良香吉野山記」という原典を拾い出して来て、それに基づいた記述、簡略な自らの文章にしているという例の一つとして挙げられている。

が、都良香の『吉野山記』の材料として使用されていることについて、その内容を略記したという大江匡房撰述『本朝神仙伝』「役の行者の事 第五」より、うかがうことができ、そして、この記述内容は、都良香の生存した時代に撰述された文献、恐らくはそのままでの内容であるから、その位置付けとしては、『三宝絵』中巻・二・役行者条以前に、都良香の『吉野山記』を置く必要があることは、申すまでもない。

おわりに

以上、述べた点を整理するならば、大江匡房の役君伝と題されたものは、『本朝神仙伝』「役の行者の事 第五」をそのように目録上題したものであつて、大江匡房には、そうした著述はないことを確認した。

次に、『本朝神仙伝』「役の行者の事 第五」の撰述に用いた都良香撰述『吉野山記』の内容について、現在知ることのできる『本朝神仙伝』「役の行者の事 第五」を用い、それが、吉野山を強調する要請に応じて作成されたものであることを確認しながら、役行者の説話を記す文献としては、『三宝絵』成立以前に、都良香撰述『吉野山記』位置付ける必要があることを述べた。

内容的に見ると、都良香撰述『吉野山記』の役優婆塞に関する事柄を叙述するのに用いた材料は、『三宝絵』中巻・二・役行者条とはほぼ同一のものである可能性が強いと考えてよからう。

役行者関係の史料としては、従来の研究成果を踏まえつつも、これを古い順に並べるならば、『続日本紀』文武天皇三年五月丁丑（二十四日）条、『日本霊異記』上巻「修持孔雀王呪法得異験力以現作仙飛天縁」第二十八という順序が揺るぐことはないが、その第三番目に、『扶桑略記』文武天皇五年正月同月条所引「役公伝」、すなわち、貞観十五年（八七三）に成立した「役公伝」（今成元昭編『仏教文学の構想』〈新典社・研究叢書〉一九九

六年七月）所収・拙稿「扶桑略記」に引かれた二つの役小角伝承について（参照）、あるいは、右に記した都良香の『吉野山記』のいずれかが、位置づけられるであろう。

これに続くものが、現在、役小角の記事に関しては、その逸文も発見されていないものの、『三宝絵』中巻・二・役行者条に見えている居士仲廉（仲広）撰『日本名僧伝』（拙稿「居士仲廉（仲広）撰『日本名僧伝』玄昉条逸文の再検討」『日本宗教文化史研究』第一巻第一号（一九九七年五月）掲載）、「居士仲廉（仲広）撰『日本名僧伝』の性格」『國書逸文研究』第三〇号終刊号（一九九七年十月）掲載）であり、『三宝絵』中巻・二・役行者条は、従来、第三番目の位置付けがなされて来たが、その位置付けは、右のように、訂正される必要があるというのが、本稿の結論である。

注

- (1) 『本朝神仙伝』は、別に、井上光貞・大曾根章介校注日本思想大系7『往生伝・法華験記』（岩波書店、一九七四年九月）二五五～七五ページ、原文五八〇～八六ページ。役優婆塞の部分の底本は、前田育徳会尊経閣文庫所蔵写本である）にも翻刻され、その「役行者の事 第五」の部分については、馬淵和夫監修・説話研究会編『日本の心 日本の説話』二・仏教説話・文学説話（大修館書店、一九八七年七月）四四～七ページ「役行者」（中野猛）において、『本朝神仙伝』三話「役行者の事」として、現代語訳と原文とが記載されている。

注目される点は、両者の解説部分である。

まず、井上光貞氏は、日本思想大系7『往生伝・法華験記』「文献解題―成立と特色―」（七三～一四一ページ）において、「役優婆塞の伝は続日本紀にみえるが、本書のは三宝絵の所伝と共通するものが多く、部分的には都良香の『吉野山記』にみえると註記された一節を加えている」と述べられている。

また、中野猛氏は、その解説部分において、「もともと古い行者伝は『日本霊異記』上巻所収話であるが、本説話はこれについて古く、別系統である」という指摘する。ここに、井上光貞氏のように、『三宝絵』の存

山に住む。常に葛木の山に遊び、其の嶮岨しきことを好めり」とある記述に端的にうかがうことができる。

前者『三宝絵』中巻が、「仙ヲモトムル志アリテ葛木山ニスム卅余年」と記し、その後「伊豆嶋ヘナガシツカハセバ」を記した後に、「ヒルハ公家ニ恐テ嶋にキタレドモ、夜ハ駿河国ノ富士峯ニユキテヲコナフ」と記しているものの、これについて、後者『本朝神仙伝』は、『続日本紀』文武天皇三年五月丁丑（二十四日）条が示した「役君小角流ニ于伊豆島・初小角住ニ於葛木山、以ニ呪術ニ称」という史実すら無視して、「昔、富士の山の頂に登り、後に吉野の山に住む」と記した後、しかし、やはり無視はできなかったであろうか、「常に葛木の山に遊び」を付加しているのである。

紙数の関係もあり、その他の点に関しては、触れることは省略せざるを得ないが、中村宗彦著『古代説話の解釈（―風土記・靈異記を中心に―）』（明治書院、一九八五年四月）第三章「役行者説話の再検討」が結論的に示された「『本朝神仙伝』は吉野山と葛城山との関係を強調する外は『三宝絵詞』の所伝と等しい」という指摘に誤りはない。しかしながら、その位置付けは異なるので、この点についてのみ、ここでは記しておくことにしよう。

『三宝絵』は、永観二年（九八四）十一月、源為憲が、冷泉天皇第二皇女尊子内親王に、出家を勧める書として奉った作品である（小泉弘解説『三宝絵詞』下解説〈勉誠社・勉誠社文庫129、一九八五年四月〉解説）。一方、大江匡房撰述『本朝神仙伝』は、三善為康撰述『拾遺往生伝』巻上・善仲・善算条の注記に、それが見えるので、康和元年（一〇九九）九月以前の成立であることは間違いない（川口久雄校註日本古典全書『古本説話集・本朝神仙伝』〈朝日新聞社、一九六七年九月〉解説「寛治以後、ことに承徳一・二年、一〇九七年より一〇九八年の間かと推測しておく」）。

両者の成立年代は、これでその順が変わることはない。

しかしながら、『本朝神仙伝』「役行者事 第五」は、その最後に、「事は、都良香が吉野山の記に見えたり。今略して記しぬ」とあり、都良香（天長十年癸丑（八三三）―元慶三年己亥（八七九）二月二十五日）が著した『吉野山記』を略記したものであると、明記されているので、その記述された内容は、『三宝絵』成立以前に成立したものを含んでいることは、間違いないところである。

『本朝神仙伝』の中に見える「中算記に見えたり」という記載のある「中算上人が童の事 第卅二」に関して検討を加えたのは、牧野和夫『扶桑蒙求私注』を通してみた一、二の問題（『日本名僧伝』その他のこと）（『東横国文学』第一七号（一九八五年三月）掲載、のち同著『中世の説話と学問』〈和泉書院・研究叢書、一九九一年十一月〉所収）である。牧野和夫氏が、『神仙伝』の仲算記は、我が国「文学」の常として、先行文献（中算記か）をほぼ踏襲し、節略弥縫したのであらう（大江匡房撰ということの意味は、当然のことながら、大江匡房の丸ことの作文を指してはいないのである。近世に至るまで、先行文献の節略弥縫の手腕に才学の軽重が問われた我が国「文学」の性格が、ここでも考慮されねばならないであらう）と指摘されたこと（とおりであるならば、この『本朝神仙伝』「役行者事 第五」の記載内容は、「中算記に見えたり」という以上に、「事は、都良香が吉野山の記に見えたり。今略して記しぬ」と、具体的に、略記したことを明示しているもので、その記述内容は、都良香の『吉野山記』に完全に依拠しているものと見て誤りなからう）。

とするならば、『本朝神仙伝』「役行者事 第五」が、葛木の一言主の神の形相について、「容貌太だ醜かりしかば」と表現している点は、「ヒルハ形ミニクシ」と表現した最初であると言われる『三宝絵』中巻・二・役行者条以前において、既に、そうした伝承が存在したことを如実に物語っていること、この点は注意をする必要があるのではなからうか。

すなわち、『三宝絵』中巻の成立以前の段階において、葛木の一言主神を中傷批判する説話が作成されたことを物語っており、そうした説話

た都良香の『富士山記』の材料の主たるものが、『三宝絵』中巻・二・役行者条と同じような材料であったことが、明確となろう。

「5」には、さらに、「役優婆塞は將に謀をなして反きたてまつらむとなす」という一言主神の朝廷への讒言を記し、その母親を捕えることによって、役優婆塞が自ら獄に繋がれたことを記している。

この点は、『日本霊異記』上巻第二十八縁の中にも見えてはいるが、『三宝絵』中巻・二・役行者条にも見えており、前述の点を考えると、後者と同質の材料に依拠したものとみるのが、自然であろう。そして、呪縛された一言主神について、『三宝絵』中巻・二・役行者条の最後の部分、すなわち、「古人伝云、『役行者』ミヅカラハ草座に乗テ、母ヲバ鉢にノセテ唐ヘワタリニケリ」トイヘリ。葛木山ノ谷ノ底ニハ、常ニ物、呻コヘキコユルを、人尋イタリテ見レバ、大ナル岩ヲ大ナル藤モトヒ縛レルヲウタガヒテ、ソノ藤ヲキレドモ即又如元ニ成ワタリヌ。又橋ノレウニセシ石ハ、削造テイマニ峰谷ニオホカリトイヘリ」という記述以上の表現を用いて、「5」は記述している。そして、「その扶くる石を吉野・葛木の山に住めしむること、各々十余枚なり」と記す中、やはり意識的に、「吉野」を加えて記述している点を見出すことができる。

「6 引其母ニ而乗ニ鉄鉢ニ、浮レ海而去、不レ用ニ舟楫、不レ知ニ何之。後本朝僧道照、到高麗ニ説法。聴レ法之中、有ニ和語者、此行者也。漸経ニ百余年、道照大驚、下レ座問訊。殊無レ所レ答、不ニ復来ニ」

この「6」の記事は、『日本霊異記』上巻第二十八縁にも見えていますが、『三宝絵』中巻・二・役行者条にも見えており、前述の点を考慮するならば、後者に依拠したものとみるのが自然であろう。

以上、『本朝神仙伝』「役行者事 第五」に示された内容について、これを簡単に見た結果、この記述内容は、吉野山の要請に基づき、それまでの伝承とは異なるもの、すなわち、吉野山という地域を加えて、役優婆塞について記したものであること、また、その主たる材料が、『三宝絵』中巻・二・役行者と極めて類似するものであることをうかがうに余りある点が明らかになったことであろう。

つまり、『本朝神仙伝』「役行者事 第五」は、その最後に、「事は、都良香が吉野山の記に見えたり。今略して記しぬ」とあった点に立ち返れば、都良香の『吉野山記』という書物は、現在、その逸文も見出だし得ないものの、この略記された内容からも、吉野山の要請に応じる形で、撰述されたものであること、またその主たる材料は、『三宝絵』中巻・二・役行者が材料としたものと共通のものであったと見てほぼ間違いなからうという点が明らかになろう。

四、『三宝絵』中巻・二・役行者条と『本朝神仙伝』「役行者事 第五」

それでは、『三宝絵』中巻・二・役行者条と『本朝神仙伝』「役行者事 第五」とは、同一の材料に依拠して記されたものなのであろうか。この点について、以下、考察を加えてみよう。

先にも若干記したところであるが、『三宝絵』中巻・二・役行者条と『本朝神仙伝』「役行者事 第五」との基本的な相違点は、『三宝絵』中巻・二・役行者条が「大和国葛城ノ上郡千原村人也。(中略)仙ヲモトムル志アリテ葛木山ニスム卅余年窟中ニキテ藤皮ヲキ給松葉ヲクヒ物トシテ清泉ヲアミテ身心ノアカアラヒ孔雀王呪ヲナラヒ行シテ靈驗ヲアラハシエタリ」と記しているのに対し、『本朝神仙伝』「役行者事 第五」は、「大和の国の人なり。(中略)昔、富士の山の頂に登り、後に吉野の

ているのであろう。

そして、配流された人物が、あたかも解き放たれ、その後で、居住するのではなく、配流という事実さえ、無視し、生まれ育った場所での事柄以上に、富士登山を強調し、その登山を初めに記し、その後、移り住んだものとして、吉野山のことを記そうとする。それが、「2」の文言「後住」の持つ意味なのであろう。

しかしながら、「続日本紀」「日本霊異記」「三宝絵」に記される「葛木山」の記載を無視することもできないため、苦肉の策で、「常遊葛木山、好其嶮岨」という文言を挿入したのであろう。

つまり、この「2」の記事は、「吉野山」という存在について、役優婆塞の伝記的な記事の中に、挿入しなければならない事情に基づいた作為を示すものに他ならない。

この「2」の記事は、それ自体が、明記しているとおり、都良香の「吉野山記」に依拠していることを如実に示すものでもある。それは同時に、この「吉野山記」という書物の性格について、それを端的に語るものでもあり、吉野山と役小角との関連性を示すとともに、それを敢えて強調する必要のある書物であることを物語っているといえよう。

「3 欲令諸鬼神、造巨石橋於岡山上。皆応呪力、漸成基趾。行者性太褊急、譴責不日也」

既に「2」において見たとおり、この「3」の記事には、石橋を造営するという伝承記事に関しても、それを「岡山上」、すなわち、吉野山と葛木山という新たな理解、というよりは、作為に満ちた記述をしようとする以外の何物でもない。

「4 一言主神、容貌太醜、謂行者曰、為慚形顔、不得昼造」

これまでの記述内容は、明らかに吉野山を中心とした作為に満ちたものであったのに対し、この「4」の部分は、「一言主の神、容貌太だ醜かりしかば」といった記事の性格及びその内容を示すものである。

「日本霊異記」上巻第二十八縁には、一言主神のことは見えるものの、その容貌を表現するような記載はない。この点については、既に、多くの先学諸賢が指摘されたように、「三宝絵」中巻・二・役行者条が記す内容、すなわち、「ヒルハ形ミニクシ」という描写と同様のものを行っている。

また、「日本霊異記」上巻第二十八縁の中に、「彼の一語主の大神は、役の行者に呪縛せられて、今の世に至るまで解脱せず」とあった表現は、「三宝絵」中巻・二・役行者条において、「呪ヲモチテ神ヲシバリテ、谷ノソコニウチヲキツ」という内容に変化していると理解されるが、「本朝神仙伝」「役の行者 第五」の記述は、「三宝絵」中巻・二・役行者条とはほぼ同様な事柄を記していることも、両者を比較すれば、自ずと判明しよう。

「5 行者敢不許止、神託宣於帝宮曰、役優婆塞、将謀反。公家捕其母、役優婆塞、不堪孝敬、自来繫獄。後逢赦得山、即縛一言主神、置於澗底。今見為所葛纏七匝、万方遂不解、呻吟之声、歴年不絶。令其扶之石、住吉野葛木山、各十余枚」

この「5」という記事は、「3」・「4」にも見えた「行者」という言葉を用いて、それまでの役優婆塞を表している。この点においても、「日本霊異記」には見えない表現であるが、その表現方法は、両者を併用して呼称する「三宝絵」中巻・二・役行者条に見える特徴と同質のものがあり、大江匡房撰述「本朝神仙伝」「役の行者 第五」に用いられ

香吉野山記、今略記之。

とある。

以下、その記事について、便宜上六箇条に分類して（以下、「」を付して引用する）、簡単に考えてみよう。

「1 役優婆塞者、大和国人也。修行佛法、神力無辺」

『続日本紀』文武天皇三年五月丁丑（二十四日）条には、「役君小角流_二于伊豆島_一。初小角住_二於葛木山_一、以_二呪術_一称。（下略）」と見え、優婆塞という呼称をもつて示されてはいないことは、既に明らかな点である。

役君小角という実在する人物に対し、これを「役優婆塞」という呼称でもつてとらえる初見は、『日本霊異記』上巻「孔雀王の咒法を修持し、異しき験力を得て、現に仙と作りて天に飛びし縁」第二十八（多田一臣校注『日本霊異記』上へちくま学芸文庫、一九九七年十一月・一九七二〇五ページ）である。

また「1」の記事の中に、「仏法」ともあるので、この記事は、『日本霊異記』あるいはその後に成立をみた『三宝絵』中巻・二・役行者（馬淵和夫・小泉弘・今野達校注新日本古典文学大系31『三宝絵・注好選』〈岩波書店、一九九七年九月〉八九―九二ページ）に収められた説話の系統へ分類されるものであることが、まづうかがえよう。

「2 昔登_二富士山頂_一、後住_二吉野山_一。常遊_二葛木山_一、好_二其嶮岨_一」

この記事は、非常に興味深い点が多い。その一つは、「昔、富士の山の頂に登り、後に吉野の山に住む。常に葛木の山に遊び、其の嶮岨しきことを好めり」というように、登場する場所が、富士山、吉野山、葛木山の順に記されている点がそれである。⁽⁴⁾

この点については、その内容が正しいか否かを考えると、奇妙ではあるが、類をみない記述順であることは、特筆に価する。

『続日本紀』文武天皇三年五月丁丑（二十四日）条には、伊豆島への配流のことは見えるものの、「初小角住_二於葛木山_一」とあり、『日本霊異記』上巻第二十八縁も、同様に、伊図の嶋に流されたことが見え、「昼は皇の命に随ひ、嶋に居て行ひ、夜は駿河の富祇の嶺に往きて修す」「大和の国葛木の上の郡茅原の村の人なりき」「大倭の国の金の峯と葛木の峯とに橋を度し、通はむ」と記し、『三宝絵』中巻・二・役行者にも、「大和国葛城ノ上郡千原村人也」「仙ヲモトムル志アリテ、葛木山ニスム」「葛木山ト金峰山ト二橋ヲツクリワタセ」とある。すなわち、役小角あるいは役優婆塞という呼称の人物の出自とその主たる行動の範囲は、大和国葛木山であることで、一致をみている。

さらに、こうした点は、『今昔物語集』巻第十一「役優婆塞、誦持呪駈鬼神語」第三（山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校註日本古典文学大系24『今昔物語集』三〈岩波書店、一九六一年三月〉六二―三三ページ）も、「大和国葛木上ノ郡、茅原ノ村ノ人也」「年来、葛木ノ山ニ住ミ」「常ニ葛木ノ山ト金峯ノ山ト二通テゾ御ケリ」といった記述をしており、のちに成立をみた説話の中にも、同様に、踏襲されていることがうかがわれよう。

しかしながら、役優婆塞は、「昔、富士の山の頂に登り、後に吉野の山に住む」と記すのが、この「2」の記事部分であり、諸書を見ればなかったであろうか、その最後に、「常に葛木の山に遊び、其の嶮岨しきことを好めり」と記しているのである。

『続日本紀』文武天皇三年五月丁丑（二十四日）条に見える伊豆島への配流という史実、それに関連させて、『日本霊異記』上巻第二十八縁が記すような「駿河の富祇の嶺」における夜の修行、こうした史実を無視する偽りの伝承をさらに推し進めていったものが、富士登山記事であり、それを示すことで、あたかも、正当な記述のような印象を与えようとし

えていた。

「役君伝」という名称の書物については、静嘉堂文庫編纂刊『静嘉堂文庫図書分類目録』（一九二九年二月 三七八ページ）の中に、確かに見える。しかしながら、それは、『本朝神仙伝』（役君伝）一卷、大江匡房撰、中山信名旧蔵、一冊、八七函 三一架、色（色中三中）のことであり、抄本である『本朝神仙伝』の所蔵する写本の冒頭が、「役優婆塞者」で始まるため、それを「役君伝」と題して、目録に記載したのであろう。「役君伝」という書名の単独の写本は、残念ながら、存在しないのである。

誤解を招く恐れのあるこの「役君伝」という名称が、どのような事情で付されたのか、その理由も不明のままであるが、元来そうした名称の書物が存在しないので、目録類からは、削除しておく必要がある。と同時に、大江匡房の撰述したのは、『本朝神仙伝』であり、その中には、「役優婆塞」という部分はあるが、それは単行のものではないので、大江匡房が撰述した書目の中からも、削除される必要がある。このことが、本稿において、指摘する第一の点である。

二、静嘉堂文庫所蔵『本朝神仙伝』について

静嘉堂文庫所蔵の『本朝神仙伝』に関しては、既に、川口久雄校註日本古典全書『古本説話集・本朝神仙伝』（朝日新聞社、一九六七年九月）解説三二〇ページ「静嘉堂文庫所蔵本 寫本一冊。黄表紙、九行十八字、墨附八丁、深譽本であり、延寶九年（一六八二）の報恩院を以て寫したよしの奥書をのせる。中山信名舊蔵。『役君傳』と題される」、川口久雄著『大江匡房』（吉川弘文館・人物叢書、一九六八年五月）十「江都督」二二八―九ページ「『本朝神仙伝』の諸本」において、「その他妙法院本・静嘉堂本・彰考館本・史料編纂所本・無窮会本・私家蔵本等があるが、何れも抄出本系である」と指摘されているとおりである。

すなわち、その冒頭の「役優婆塞事」に続き、「泰澄」「教待和尚」「東寺僧「失其名」」「沙門日蔵」に関する記事が見えるのである。この写本は、権律師深譽という僧侶が、応安元年（一三六八）六月廿七日、遍智院二品親王御本をもって書写したという僧正弘賢持来本、それから抄出したものが、謄写原本であり、この謄写原本には、「本朝神仙伝抜粹一卷」と記されており、静嘉堂文庫所蔵『本朝神仙伝』は、その事を記した上で、書写に用いた醍醐水本報恩院本について、これを延宝九年（一六八二）辛酉冬十月に書写したものである（延宝九年九月二十九日に改元されて天和元年となっているので、この年号を持った十月は存在しない）。

三、「本朝神仙伝」「役行者事 第五」について

大江匡房撰述『本朝神仙伝』『役行者事 第五』の内容について、川口久雄校註日本古典全書『古本説話集・本朝神仙伝』（朝日新聞社、一九六七年九月）三三八―四〇ページ「役行者事 第五」。底本は、野村素介氏旧蔵本）によつて示せば、次のとおりである。すなわち、

役優婆塞者、大和国人也。修_レ行_レ仏法、神力無_レ辺。昔登_二富士山頂_一、後住_二吉野山_一。常遊_二葛木山_一、好_二其嶮岨_一。欲_レ令_二諸鬼神_一、造_二巨石橋_一於_二両山上_一。皆応_二呪力_一、漸成_二基趾_一。行者性太偏急、譴責不_レ日也。一言主神、容貌太醜、謂_二行者_一曰、為_二慚_一形顔、不_レ得_二昼造_一。行者敢不_二許止_一、神託宣_二於帝宮_一曰、役優婆塞、將_二謀反_一。公家捕_二其母_一、役優婆塞、不堪_二孝敬_一、自来繫_レ獄。後逢_二赦得_一山、即縛_二一言主神_一、置_二於澗底_一。今見_二為所_一葛纏_二七匝_一、万方遂不_レ解、呻吟_二其声_一、歷年不_レ絶。令_二其扶之石_一、住_二吉野葛木山_一、各十余枚。引_二其母_一而乘_二鉄鉢_一、浮_レ海而去、不_レ用_二舟楫_一、不_レ知_二何之_一。後本朝僧道照、到_二高麗_一説_二法_一。聴_レ法之中、有_二和語者_一、此行者也。漸経_二百余年_一、道照大驚、下_二座問訊_一。殊無_二所答_一、不_レ復来_一。事見_二都良

大江匡房の役君伝について

小山田 和 夫

はじめに

平安時代後期の公卿であり、後三条天皇、白河天皇、堀河天皇の東宮学士も務めた同時代を代表する文人貴族である大江匡房（長久二年辛巳（一〇四二）～天永二年辛卯（一一二二）十一月五日（七十一歳））には、わが国の神仙を伝した『本朝神仙伝』の撰述が知られる。

その『本朝神仙伝』の中に、のちに修験道の開祖として多くの伝説が語られる人物「役行者」の伝を記載した「役行者事 第五」という部分があることは、川口久雄校註日本古典全書『古本説話集・本朝神仙伝』（朝日新聞社、一九六七年九月）三三八～四〇ページ「役行者事 第五」、川口久雄著『大江匡房』（吉川弘文館・人物叢書、一九六八年五月）十「江都督」二二七～二〇ページ「本朝神仙伝」の撰述、「本朝神仙伝」の諸本、「本朝神仙伝」の内容」などによって、周知のところである。

大江匡房が撰述した書目に、森末義彰・市古貞次・堤清二編『補訂版国書総目録』第一卷（岩波書店、一九六三年十一月初版。一九八九年九月補訂版第一刷）五二九ページが記すように、「役君伝」（一巻、類一伝記、著一大江匡房、写一静嘉）と題する伝記があるとするならば、これを川口久雄氏が見逃すはずはなからうと、以前から、思っていた。

事実その通り、川口久雄校註日本古典全書『古本説話集・本朝神仙伝』（朝日新聞社、一九六七年九月）「解説」三二〇ページ「静嘉堂文庫本 写本一冊」に、「中山信名旧蔵。『役君伝』と題される」と明記されている。^①

これで、『国書総目録』第一卷（岩波書店、一九六三年十一月初版）が示す大江匡房の撰述書目の中から、『役君伝』というものは消去されることであらうと思っていたものの、その増補版でも踏襲され、また、現在刊行中の最も信頼できる辞典と評した（拙著「入門 史料を読む―古代・中世」―吉川弘文館、一九九七年十一月）「史料を採す」一八五ページ）市古貞次監修『国書人名辞典』第一卷（岩波書店、一九九三年十一月）三〇七ページの中に、大江匡房の著作として、『役君伝』というものが採録されており、半信半疑のまま数年が経過した。一度、実際に調査確認する必要があると考えながら、それを果たさぬまま、今日に至った。^②

以下、大江匡房の「役君伝」という名称で記載されている書物及び『本朝神仙伝』「役行者事 第五」について、いささか考察を加えてみることにしよう。

一、大江匡房の「役君伝」と題されたもの

大江匡房が著した「役君伝」という書物が存在するのであれば、その撰述した『本朝神仙伝』の中に、「役行者事 第五」の記事の最後に、「事見都良香吉野山記、今畧記之」とあるように、都良香（天長十年（八三三）～元慶三年（八七九）二月二十五日）が著した『吉野山記』という書物を閲覧し、それを略して記載するというのは、妙なことである。また『扶桑略記』の撰者として、大江匡房が、その候補にも挙がっているものの^③、仮に、そうであるとしたならば、実際に、自己の書物をどの程度、『扶桑略記』の中に引用しているのか、という点にも、明らかでない部分が多く、こうした素朴な疑問も、一挙に氷解するのではないかと考